

聖語藏經卷管見 —調査報告にかえて—

赤 尾 栄 慶

中国・朝鮮半島・日本という漢字文化圏の中で、人から人へ大切に伝えられてきた伝世の古写本や書跡を大量に伝えている国は、わが国を措いて他にはない。そのような状況を生み出すのに、大きな役割を担ったのが南都をはじめとした各寺院の経藏であった。その中でも、最も由緒正しき経藏といってよいのが東大寺尊勝院の経藏であった聖語藏であろう。

もともと、中国では膨大な数の写経類は既に失われてしまい、わが国に伝世している古写経がわずかに知られる程度であった。その中でもよく知られた遺品が現在、京都・知恩院の所蔵となっている国宝『菩薩処胎経』であり、国宝『大樓炭経』巻第3である。前者には、全体5帖のうち3帖に西魏大統16年(550)の奥書があり、人から人へ伝えられた伝世の写経としては現存最古と考えられるものであり、後者には唐の咸亨4年(673)の奥書があり、写経体と呼ばれる精鋭で謹厳な字すがたの絶頂期の遺品である。巷間に散在しているもの以外で、まとまった伝世の隋唐写経となると、聖語藏の一群ということになる。

この度、その聖語藏の経巻の中から、隋唐写経に分類されているもの11巻に加えて、奈良写経4巻、新羅写経と見られるもの1巻を実見する機会が与えられた。以下の報告の内容は、目視による観察をもとにしているが、賢劫経巻第2(隋経1号)・大智度論巻第38(隋経2号)・大莊嚴論巻第4(隋経6号)の隋経3巻、阿毘達磨大毘婆沙論巻第178(唐経2号)・四分律巻第18(唐経6号)の唐経2巻、根本説一切有部毘奈耶雜事巻第19(神護景雲経115号)の奈良朝写経1巻と新羅写経かと目される大方広仏華嚴経自巻第72至巻第80(甲種写経10号)の1巻の紙質については、繊維調査を実施した。なお、報告本編で各調査対象に付したID番号を本稿でも採用することにより、記載内容の相互参照の便を図った。

隋唐時代に分類されている写経に関しては、聖語藏の伝世の経巻らしく、首尾完存していることには驚かざるを得ない。隋唐経に関しては、『正倉院聖語藏経巻目録』(『昭和法寶総目録』第1巻には『正倉院御物聖語藏一切経目録』2巻として採録)によると、隋経は8件22巻、唐経は30件221巻となっている。

まず、隋経に分類されている3巻の概要を見てみよう。まず、これら3巻の隋経については、紙質検査を実施したのであるが、薄手の簀の目の細かい上質のしっとりとした麻紙と見られていたものが、繊維調査では楮繊維との結果が出た。

賢劫経巻第2(隋経1号)(ID120)

西晋の竺法護訳の經典で、8巻よりなっている。この巻第1の巻末には、大業6年(610)2月8日、扶風郡雍県三泉郷民らの発願により、京郡長安県の羅漢道場において書写された旨の

奥書がある。

巻第2の法量は、縦26.2cm、本文は全体17紙からなっており、全長は834.1cmとなっている。1紙の平均的な長さは50.3cmで、1紙に書写されている行数は28行となっている。このような規格は、スタインやペリオなどの敦煌コレクションにある7世紀初期の写本の規格と一致している。紙厚は、0.07mmで、透過光による観察では、1寸あたりの簀の目の数は17本程度である。紙質は、漉きむらのない上質の薄手の麻紙と見られていた料紙であり、隋時代の特徴がよく現われている料紙でもある。紙を継いでいる糊代が1mmと非常に細くなっており、装潢技術の高さが知られる。重量は105.9gとなっている。

本文は、写経体と呼ばれる楷書になる直前のしなやかで端正な字すがたで書写されている。表紙に関しては当初のものか俄かには判断しがたいが、「賢劫経巻第二」の外題があり、その上には「東大寺印」の朱方印が捺されている。

大智度論巻第38（隋経2号）（ID121）

姚秦の鳩摩羅什訳で、全100巻、大乘經典を代表する論書である。この法量は、縦26.5cm、本文は全体20紙からなっており、全長は908.3cmになる。1紙の平均的な長さは45.6cm前後で、1紙に書写されている行数は26行である。紙厚は、0.06mmで、透過光による観察では、1寸あたりの簀の目の数はやや見にくいものの、24本程度、簀の糸目巾は3.2cm程度となっている。上質の薄手の麻紙と見られていたもので、やはり紙を継いでいる糊代が1mm程度と非常に細くなっている。

字すがたは、筆のおさえや払いに古様さを残しており、その書写年代は、隋時代より遡る6世紀後半かと見られる。

大莊嚴論巻第4（隋経6号）（ID122）

姚秦の鳩摩羅什訳で、『大莊嚴論経』とも呼ばれる經典で、全15巻からなる。この法量は、縦26.4cm、本文は全体14紙からなり、全長は557.9cmとなっている。1紙の平均的な長さは41.7cm前後で、1紙に書写されている行数は24行である。紙厚は、0.05mmで、漉きむらがなく、1寸あたりの簀の目の数は、32本程度、簀の糸目巾は4.1cm前後、薄手の簀の目の細かい上質のしつとりとした麻紙と見られていた料紙である。各紙の22行から23行目の上下には、界線用と見られる針穴が見られる。界線用と見られる針穴は、6世紀の敦煌写本にもしばしば見られるものである。

字すがたは、『大智度論』と同じように、筆のおさえや払いに古様さを残しており、その書写年代は、やはり隋時代より遡る6世紀後半かと見られる。第1紙と第2紙の紙背継目に「普光／寺印」朱方印が捺され、巻首下にも同印の左半分が残っている。

これら3巻のうち、最初の『賢劫経』巻第2（隋経1号）は、奥書はないものの、隋時代大業6年の書写と見て間違いなく、伝世の古写経としては稀有の存在である。残りの2巻である、『大智度論』巻第38（隋経2号）と『大莊嚴論』巻第4（隋経6号）は、その字すがたより、

隋時代よりやや遡るものと見られる。このような経巻が伝来していることは、奇跡的なことといえる。ことに紙質に関しては、いずれも楮繊維という結果が出たことは特筆すべき知見である。

次に唐時代に分類される 8 巻を見てみることにする。

大乘大集地藏十輪經 自卷第 1 至卷第 5 (唐経 1 号) (ID123)

唐の玄奘が翻訳した經典で、1 行に 25 字前後の所謂「細字経」形式で書写されており、全体 10 巻のうち、巻頭に聖教序が付された巻第 1 より巻第 5 までを 1 巻としている。法量は、縦 27.8cm で、全 43 紙、全長は 2405.1cm にもなっている。料紙には紙長の異なる 2 種類の料紙が用いられており、57cm 弱のものには 40 行が書写され、58cm 強のものには 41 行が書写されている。紙を瑩いたかと思われるほど、非常に紙表がつややかな仕上がりとなっている。糊代は 2.5mm となっている。

全体に白点が稠密に施されており、巻末には「此上五卷正暦三年(994)五月十五日点了」という白書による加點奥書がある。また、現在見えている「大乘大集地藏十輪経巻第五」という尾題は、後筆であり、その左側には文字が書かれていた痕跡が残っていることから、書写された当初は、まだ続いていた可能性も否定できない。現在の尾題の右下には擦り消された本来の尾題がうすく見えている。

阿毘達磨大毘婆沙論卷第 178 (唐経 2 号) (ID124)

唐の玄奘訳になり、全 200 巻からなる論書。縦 26.5cm、全 13 紙で、全長が 603.6cm となっており、料紙はうすい茶褐色でしっとりとした麻紙と見られていたが、紙質検査の結果は、楮繊維が主体の料紙であることが確認された。平均的な 1 紙長は 48.2cm 前後で、1 紙に 30 行が書写されている。簀の目の数は 1 寸あたり 32 本程度、紙厚は、0.09mm であり、紙背の紙継部分に「大唐蘇／常侍写／真定本」という朱方印が捺されている。

巻末には永徽 6 年(655)の訳場列位の抜書きと短い願文が付されており、願文にある「大唐中大夫内侍護軍仏弟子観自在」と蘇常侍が同一人物との見方がある。いずれにしても、蘇常侍という人物について詳しくは知りえないが、唐時代の博弘にもその名が見られることなどを勘案すると、精品とはいえないものの、その書写年代は 7 世紀後半と考えられる。

ただし、一般的には開成 2 年(837)に刻された「開成石経」以降と思われる「來」「學」「觀」などの字体が用いられていることは、注目される点である。

成唯識論卷第 4 (唐経 3 号) (ID125)

唐の玄奘訳になり、全 10 巻、唯識法相宗の根本論書である。軸付紙の紙背部分に「顕慶四年(659)潤十月廿七日」という墨書がある。縦 26.4cm、全 16 紙で、全長が 823.5cm となっている。平均的な 1 紙長は 58cm 強で、1 紙に 35 行または 36 行が書写されている。紙厚は 0.12mm とやや厚い方であるが、簀の目の数は 1 寸あたり 35 本程度が確認される。全体に白点が稠密に施されている。

その字すがたが、先の『阿毘達磨大毘婆沙論』巻第178（唐経2号）に通じるところがあると見られるので、同じく7世紀後半の書写になるものであろう。

大智度論巻第68（唐経5号）（ID126）

縦27.9cm、全17紙で、全長が940.4cmとなっている。平均的な1紙長は56cm前後で、1紙に27行が書写されており、本文中に則天文字の「囧」の使用例も確認される。紙厚は0.1mmであり、簀の目の数は1寸あたり20本程度が確認され、簀の糸目巾は3.4cm前後である。重さは190.9gとなっている。第5紙にのみ、茶毘紙風の紙が使われており、巻末に「以安祥房本比較了」の墨書がある

料紙は、肉眼では麻紙か楮紙か判断が難しい。1紙目の上端に「一交光豊」かと判読できる裏写りの文字痕が確認され、茶毘紙風の紙の使用ということも勘案すると、唐時代の書写ではなく、奈良時代後半の書写と見た方が妥当かと思われる。

四分律巻第18（唐経6号）（ID127）

姚秦の仏陀耶舎と竺仏念の翻訳で、全60巻、律宗における重要な典籍である。縦26.3cm、全体は23紙、全長は1108.6cmで、1紙長が47.6cmから48.9cmとやや不ぞろいではあるが、基本的には1紙27行の書写となっている。紙厚は0.09mm、簀の目の数は29本前後、簀の糸目巾は2.1cm程度である。漉きむらのない上質の料紙が用いられているが、紙質検査の結果は楮を主体した料紙であることが確認された。横22.9cmの茶地の原表紙が残っており、「四分律巻第十八」の外題、第1紙との継目には「東大／寺印」が捺されている。全体の重さは213.2gとなっている。

本文は、細身の筆線で落ち着いた字すがたで書写されており、その本文には朱点や白点も施されている。

顯揚聖教論巻第13（唐経8号）（ID128）

唐の玄奘訳で、全20巻。縦26.7cm、全17紙、全長は792.1cmで、平均的な1紙長は48cm前後であり、1紙に26行が書写されている。紙継部分には界線用の針穴が上下にある。横が20.4cmの原表紙には、「顯揚聖教論巻第十三」の外題がある。紙背には、「松宮／内印」「東大／寺印」の朱方印が捺されている。

漉きむらのない上質の料紙であり、紙厚は0.09mm、簀の目の数は29本前後、簀の糸目巾は2.7cm程度であるが、紙質は楮かも知れない。重さは168.5gとなっている。字すがたは、中倉34『梵網経』（ID118）にも通ずる端正なものとなっている。

印影のうち、「松宮／内印」は、聖武天皇の蔵書印かと目されるものである。

大乘阿毘達磨雜集論巻第14（唐経9号）（ID129）

唐の玄奘訳で、全16巻。縦26.5cm、全19紙、全長886.8cmとなっており、平均的な1紙長は46.8cm前後で1紙に28行が書写されている。紙厚は0.09mmで、簀の目の数は見えにくいものの28本程度と思われる。1紙28行という規格は、唐時代の写経のスタンダードな規格である。横16.7cmの原表紙が残り、「大乘阿毘達磨雜集論巻第十四」の外題と「東大／寺印」の朱方印が捺されている。見返しには「馬道」の墨書がある。重さは172.6gになっている。

本文には白点が施されている。

解深密經卷第2（唐經26号）（ID130）

唐の玄奘訳、全5巻からなり、唯識瑜伽行派の根本經典の1つ。縦25.7cm、全15紙、全長は725.4cm、一紙長は49.8cmから50.8cmとばらつきはあるものの、1紙の行数はいずれも28行となっている。長さ19.9cmの原表紙には、「解深密經卷第二」の外題の上には「東大／寺印」、表紙と第1紙の継ぎ目にも「東大／寺印」の朱方印が捺されている。紙厚は0.1mm、簀の目の数は見えにくいものの31本程度と思われる。重さは146.6gである。

本文は、やや小粒でしなやかな字すがたとなっている。

これらの写經に関しては、敦煌写本が発見されて100年を経た状況下では、敦煌写本によって唐時代のみならず、中国5世紀から11世紀の古写經の変遷がある程度俯瞰できるようになっている。例えば、唐時代の標準的な写經は、1紙28行の形式で書写されており、唐時代でも7世紀後半の写經の字すがたと料紙が最高の出来映えを見せていることなどが知られる。

この点からすると、実見した唐時代と思われる經卷は、その大半が唐時代の規格通りに書写されたものではなく、残念ながら、その字すがたも精写されたものとは言い難い。これらの經卷のカタチや内容が中原の仏教の状況を伝えているのか、江南の状況を伝えているかという観点からアプローチできれば、また見えてくる世界が違ってくるかも知れない。

8巻のうち、2巻については、紙質検査を実施し、ともに楮繊維主体の料紙であったことが確認されたが、現在、唐写經に分類されている写經の中には、奈良時代に書写されたものが混在している可能性が大きく、今後の精査も必要となろう。また玄奘訳が多く、法相宗に関する經典も多いということは、当時の仏教事情を反映しているということかも知れない。

我が国の写經では、奈良時代の光明皇后発願「五月一日經」と称徳天皇勅願「神護景雲經」が重要な写經群となっている。それらの中で、実見した四巻の概略を述べよう。

瑜伽師地論卷第8（天平經77号）（ID131）

唐の玄奘訳、全100巻で、唯識瑜伽行派の根本論書の1つ。願文の末尾に「天平十二年五月一日記」とある光明皇后発願の「五月一日經」の一卷である。法量は、縦26.4cm、全体は18紙、平均的な1紙長は45.7cmで、24行の書写となっている。紙質については、僚卷である卷第54について繊維検査を実施した結果、大麻を主体とした麻紙であるとの結果を得た。

紙厚は0.09から0.13mm、簀の目が見え難いものとなっている。表紙や經軸も当初であり、表紙には「瑜伽師地論卷第八」の外題があり、經軸は撥形赤密陀軸となっており、軸付部分の紙背には「国足 同日丹比道足二校正了」と読める校正の墨書が残っている。

表紙と第1紙の継目には、「東大／寺印」の朱方印も捺され、本文には白書による訓点が施されている。

如来示教勝軍王經（神護景雲經2号）（ID132）

唐の玄奘訳になる經典。卷末に神護景雲2年の發願文を有する称徳天皇勅願の一切經で、一般に「神護景雲經」と呼ばれている奈良時代後期を代表する古写經である。表紙や卷紐は新補されているが、經軸は当初の撥形白密陀軸が残っている。法量は縦27.9cm、全体9紙で、全長は510.2cmとなっており、平均的な1紙長は56.9cm、1紙に24行が書写されている。紙質は、楮紙かとも見られ、紙厚は0.07から0.11mm程度であり、簀の目が見え難いややむらっけのある料紙となっている。本文の手が非常に優秀であり、「神護景雲經」の中でも優品に挙げられる1巻である。

根本説一切有部毘奈耶雜事卷第19（神護景雲經115号）（ID133）

唐の義浄の翻譯になる律典で、全40巻。縦27.7cm、全17紙、全長955.8cmとなっており、本紙に加えて表紙や經軸も原装を留めている。表紙の大きさは、縦27.7cm、横は19.8cmで、「根本説一切有部毘奈耶雜事卷第十九」の外題が認められている。本紙にはマユミから漉いた茶毘紙が用いられ、紙厚が0.2mmから0.24mm程度、紙背には紗漉きの痕跡が見られる。繊維調査では、マユミに少し雁皮を配合したものという結果が得られた。茶毘紙を用いていることから、奈良時代後期に書写されたものと見られるが、1紙の平均的な長さは56.4cm前後で26行の書写となっている。

金光明經卷第1（神護景雲經120号）（ID番号なし）

北涼の曇無讖の翻譯で、全4巻からなる經典の卷第1である。縦27.8cm、全24紙、全長は1363.4cm、平均的な1紙長は、57.3cm前後で、1紙には24行が書写されている。横24.1cmの原表紙には「金光明經卷第一」の外題があり、卷首には經序があるが、卷末の發願文はない。紙厚は、0.1mm、簀の目の数は26本程度となっている。簀の糸目巾は3.0cm弱となっている。肉太の筆線の字すがたが奈良時代後期の書写を思わせる。

卷首にある「經序」は、その大半が隋の費長房の撰になる『歷代三寶記』卷第12（大正藏49卷106頁上）に引用されている。

これまで古写經の調査といえば、一切經や『大般若經』、そして『法華經』をはじめとした裝飾經などの文化財的側面を中心とした書誌学的調査が一般的であった。もちろん、訓点資料としての古写經は、はやくから知られてはいたが、肝心の經典の中身である教説などについては、仏教学の分野からのアプローチはさほど多くはなかったのが実情であろう。何故なら、一般的に仏教を研究しようとする者は、「大正新脩大藏經」をテキストとして使用してきたからである。

そのような流れが今、変わろうとしている。名古屋の「七寺一切經」に続いて、河内長野の「金剛寺一切經」の調査によって安世高訳の古逸經典の存在という驚くべき事実—『安般守意經』・『仏説十二門經』などの經卷—が報告され、それに加えてしばしば調卷の相違や字句の異同等が指摘されるに至った。このような中で、印刷物の經典から写本の經典に立ち戻って、今一度、仏教の研究を行おうとする動きは、わが国のみならず、中国の研究者にも大きな影響

を与えており、個々の写本の仏典やその集大成である一切経の研究が見直されてようとしている。ことに、『正倉院聖語藏経巻目録』によれば、「天平十二年御願経」は126件750巻、「神護景雲二年御願経」171件742巻という数の写経が正倉院に伝存していることから、これらの経巻が写経による一切経の再構築という新たな事業に果たす役割は実に大きいと考えられる。

最後に新羅写経かと見られている1巻について概略を述べよう。

大方広仏華嚴経自巻第72至巻第80（甲種写経10号）（ID134）

唐の実叉難陀の翻訳になる80巻『華嚴経』の巻第72から巻第80までを1巻に書写したものであるが、全文の書写ではなく、経文を抜き書きした要文的な写経となっている。縦26.0cm、全55紙、全長は3077.5cmにも及ぶ長巻となっており、平均的な1紙の大きさは56.7cm前後となっている。紙厚は、0.06mmから0.09mm、簀の目は約34本が確認でき、紙質については、繊維検査の結果、楮を主体としたものであった。1紙には32行が書写され、1行の字数は17字から20字であるが、界線の無い無界の写経となっている。無界の経典は、漢字文化圏を見渡しても、その類例が少なく、わが国の写経としては、長屋王の発願になる2度の『大般若経』（和銅経、神亀経）が知られる程度である。

現在、確実な新羅写経として知られているのは、天宝14年（755）の奥書を有する80巻『華嚴経』（韓国・湖巖美術館蔵）のみであり、これは1行34字詰にして書写して、10巻分を1巻に調巻したものである。その巻第10の末尾には、書写に関する詳細な奥書があり、料紙については楮紙を使ったことなどが知られる。この1巻については、類品の出現が切望される。

以上、実見する機会を得た聖語藏16巻について概略を述べた。隋経に分類されているものでは、『大智度論』巻第38と『大莊嚴論』巻第4の2巻が隋時代よりも古い書写かと思われる。また、唐時代の写経では、8巻のうち、6巻が玄奘の翻訳になる経典であったが、必ずしも精品とは云いがたく、奈良時代に書写されたものが混在している可能性がある。新羅写経と目される1巻については、今後の更なる研究を待ちたい。

紙質に関しては、従来から麻紙と見られていた隋唐経などが、いずれも楮主体の繊維であるとの結果が出たことについては、大きな衝撃であった。楮繊維となると、従来から中国の古代の写経料紙は、麻紙という定説を見直す必要に迫られることになった。

聖語藏の中核をなす天平写経の「五月一日経」については、基本的には玄奘が中国から将来した『開元釈教録』入蔵の経典をもとに書写されていることから、唐時代の最新の経典の状況を転写していると考えられる。これらは、現在進行中の写本一切経の構築に大きな役割を果たすことは間違いない。このように聖語藏の経巻群は、中国・朝鮮半島・日本という漢字文化圏を貫く貴重な文化財であり、現在進行中のデジタル化出版がもたらす情報は、仏教学・書誌学・国語学などの学問分野において必見すべき重要な情報源であるといつて憚らない。